

小説 あらおし悠

挿絵 彩葉

立ち読み版

いもうと
妹の
ツキツキツキ
ツキツキツキ
ツキツキツキ
ツキツキツキ



プロローグ 妹の生意気な唇

第一章 妹の唇で強制レッスン

第二章 暴けるか、妹の秘密！

第三章 突然のデートと水着の誘惑

第四章 水着姿でお兄ちゃんに……

第五章 お祭りの夜に三人で……

エピローグ これからも一緒にペロペロ

登場人物紹介

Characters



みはらゆず

三原 柚

友治と同じ専門学校に通う学生。物静かでおっとりした女性で絵本作家を目指している。



ふじいちか

藤井 千佳

最近は生意気な態度をとることが多い、友治の義妹。胸がささやかなのが残念なところ。

ふじいともはる

藤井 友治

イラストレーターを目指している専門学校生。千佳の接し方に手を焼いている。

そして——。眼の焦点が合わないほどに近い妹の顔。半開きになったぷりぷりの唇からは、飴玉のように甘い吐息が、ほのかに漏れて鼻孔をくすぐる。

友治は無意識のうちに、まるで蜜の匂いに誘われたミツパチのように唇を寄せた。しかし、腕の中で身じろぎする、千佳の小さな動きにハッとする。

(……って、妹相手に何をしようとしてんだよ俺はっ!!)

気まずい雰囲気はどう修正しようか。暴れん坊のくせに細い肢体。そして、腹に押しつけられるのは、そのサイズに見合った、極めて控え目な少女の象徴。

「……お前、頭の中と一緒で、こっちは少しも成長しないんだな」

一瞬にして、何を言われているのか理解したのだろう。千佳は、羞恥で耳まで真っ赤に染め上げ、左手で胸を隠すと同時に、もう一方の腕を振り上げた。

——パーンッ!

「バカッ! 変態っ! くたばれっ、こんのバカ兄貴があーッ!」

「ぐはあっ!」

コンプレックスを直撃した無神経な兄に平手打ち。しかも、涙目で部屋を飛び出すのかと思ったら、ご丁寧にも去り際に、とんでもない捨て台詞を残していった。

「あ、お兄ちゃんのだーい好きな巨乳エロ本は、全部あたしが処分しておいたから」

「な……なにいつ!!」

トテトテと軽い足音が階段を降りていく。泡を食ってベッドの下や本棚の上を搜索。千

佳の言葉通り、夜のおかずが一冊残らず消え去っている。これも、彼女との間に幾度となく繰り返されてきた攻防だった。いくら巧妙に隠し場所を変えようと、千佳はすぐに見つけてしまう。二度と手に入らない貴重なお宝も、どれほど失ったことだろう。

身体的なダメージばかりか、精神的にもショックを与えられ、朝から力尽きた友治は、ガツクリと床に手を突いた。

「今日は大事な日だっというのに……何だっってこんな出鼻を挫かれるようなこと……」

腹や頬をさすりながらダイニングに入ると、まるで何事もなかったかのような澄まし顔で、千佳がトーストを食^はんでいた。ただ、好物のオレンジジュースをゴクゴクと一気に飲み干した後、不愉快そうに唇を曲げたところから察するに、乙女心のご機嫌斜めは直っていないようだ。

「なあおい、千佳……」

さっきのことを謝ろうかと思ったが、キッチンに立つ義母の目が気になって言い出せない。妹のバストサイズの話など、彼女の親の前で言えるはずがない。

「——お兄ちゃん、遅刻するよ」

棒立ちになっていると、千佳がバターでテラテラになった下唇を突き出して、壁掛け時計を指し示した。

「え？ あっ？ もうこんな時間なのか!!」

「だから親切に起こしてあげたのに。……それに、今日は大事な用があるんでしょー？」
「なっ……何でそれを……！」

妹の馬鹿にした口調に、危うく自分から白状しそうになる。家でその話をしたことはないし、千佳が友治の想い人を知っているはずもないのに。

(き、きつと講義のことだな。うん、そうに違いない)

意味ありげに吊り上がる千佳の口の端を気にしつつ、友治は大慌てで家を飛び出した。

電車で約四十分。友治が通っているのは、都心にほど近いビルの中にある、デザイナー専門学校。昔から絵を描くのが好きで、もしかしたらここで将来の目標が見つかるかもしれないからと、モラトリアムの安易さで選んでしまったのだが、入学した直後から、早くも周囲との温度差を感じていた。

「みんな、ちゃんとした目標を持って来てるんだよなあ……」

クラスには、イラストレーターや漫画家、アニメーションやゲーム業界を目指す者が大半で、中には早くも仕事としてホームページやブログのデザインをしたり、携帯ゲームのコンテンツ開発に携わっている者もいたりするらしい。

ともかく、漠然とイラストの勉強がしたいなどとはか考えていない友治のような呑気者は、ここでは少数派のようだ。

「——おはよう、トモくん」

専門学校のある七階へ向かうためエレベーターを待っていると、鈴を転がすように軽やかな、それでいて落ち着きのある女性の声が、友治の背中に呼び掛けた。

「あ、三原……さん」

確認するまでもなく声の主が誰かを悟り、一瞬にして全身が緊張する。引き攣った笑みを強引に作って振り返ると、予想通り、そこには大きなトートバッグを肩に掛けた、清楚な白いワンピース姿の女性が立っていた。

「どうしたの、眠そうだよ？　ちゃんと朝ごはん食べてきたのお？」

時折、語尾が間延びする、おっとりとした喋り方。細い指先で口元を隠し、コロコロと笑う上品さ。お尻まで届く長い黒髪は、軽くウェーブが掛かって、彼女が笑うたび、まるで繊細な絹糸のようにふわりと揺れる。シャンプーの匂いだろうか。妹とは違う爽やかな香りに、友治の胸はドキドキと高鳴りっぱなしだ。

彼女が、友治が何度も告白を試みていまだに叶わない、同じクラスの三原柚ゆずだった。

鼻筋が通り、整った顔立ち。切れ長ながらも下がった睫毛が眼に優しそうな雰囲気を出し出す。化粧っ気は感じさせないが、ほんのり桃色の、ぼつてりと柔らかそうな唇は、いつでも穏やかな微笑みを湛たえている。

（三原さん……いつ見ても綺麗だなあ……）

派手さとは無縁の、ネクタイ付きのノースリーブ。上品な彼女によく似合う長めのブーツ。こう見えて意外にアクセサリーが好きで、ネックレスや小さなイヤリングなどを日替

わりで身につけていた。今日は細いブレスレットが数本ばかり。目立たないおしゃれが、控え目な彼女らしい。

母性のような温かさを感じさせる袖だが、その主たる原因が、彼女の身じろぎでぼよんと揺れた。誰もが眼を引かれずにはいられない、豊かすぎる、胸。サイズはEか、それともFはあるだろうか。

(いつ見ても凄……いやいや、こんなに見たら失礼だ)

どうしても引き寄せられる視線を、たわわな果実から必死に引き剥がす。彼女と会うたびに、友治はいつも心の中で欲求との格闘を強いられていた。

「実は、わたしもよく寝坊して、朝ごはん抜いちやうことあるんだけどね……」
友治の劣情など知らず、うふふと、屈託のない笑顔を見せる袖。しかし、深窓の令嬢という形容も似合いそうにおっとりした彼女も、友治にコンプレックスを抱かせるひとり。

——わたし、絵本作家になりたいの。

春のコンパで、無垢な瞳を輝かせながらそう夢を語る姿に強く惹かれた。と同時に、彼女を遠く感じたのも事実。

短大を卒業した後、わざわざここに入り直したらしい。強い憧れと共に、スタート時点ですでにみんなと差があるのだと、まざまざと思い知らされた瞬間でもあった。

「……トモくん聞いてる？」

我に返る。彼女との思い出に浸って、つい返事がおろそかになっていたようだ。

「あ、いやその……すみません……」

年度的にはふたつ上だが、遅生まれと早生まれで誕生日が近いので、実際には一歳と少し違うだけ。最初の講義でたまたま隣の席になって以来、彼女の方から話し掛けてくれるし、呼び方も、いつの間にか「トモくん」になっている。

ただ、しばらくしてから気づいたことだが、柚が気さくな態度を取る異性は友治だけのようだ。他の男に自分から近づく場面は、まずほとんど見られない。

（そんな風に差をつけられたら……期待しちゃうじゃないか）

ならば、早いところ告白して恋人同士になってしまえばよさそうなもの。だが、問題は友治にあった。

女性——ことに好きな人の前では、どうしても硬くなってしまふ。長年の付き合いで本物の家族同然の妹には、セクハラまがいのことも言えるのに。

離婚した母親の「女性は大事にしなくてはいけない」という教育方針が効きすぎたのだろうか。接触することすら憚^{はば}られると思うようになってしまったのだ。

私の強い女性は特に苦手で、好きになるのはおっとりタイプ。柚など、まさにど真ん中のストライクなのだが、それゆえ、好きになればなるほど触れるのが怖くなるという悪循環に、今まさに陥っている最中なのだった。

「ねえトモくん。昨日出された課題、難しくなかった？」

「えっ？ あ……ああ、はい。そ、そうですね」

教室に入り、スケッチブックを出しながら授業の話題になる。昨日の課題は、有名な清涼飲料を題材に、そのCMで使えるようなキャラクターを考えてくるというもの。商品のイメージを損なわず、かつ視聴者の印象に残るものをとというのが講師の注文だが、みんなの顔色を見ると、それぞれに苦労したようだ。

「おーっす、柚、藤井君。今日の飲み会、忘れてないでしょうね？」

課題の話で教室がザワザワしている中、柚の女友達が近寄ってきた。もちろん忘れてはいない。それこそが、今日の一番大事な用事なのだから。その席で、あるいは終了後を狙って、柚に想いを告げる予定なのだ。もちろん、酒の力を借りた上で。意中の人を横目で窺う。もし彼女が急遽欠席ということにでもなれば、こちらの予定も変わってくる。

「もちろん出るよお。何時からだっけ？」

柚の返事に安堵するも、急に気が重くなった。これで、告白を実行しなくてはいけないという追い詰められた感覚と、失敗した場合の不安。しかし、彼女を想って悶々と自分を慰める夜はもう嫌だ。友治は、数時間後の宴に向けて、ぐつと腹をくくった。

「それじゃ、試験前の景気づけに、かんばーい！」

十数人が集まって、居酒屋の座敷でテーブルを囲む。本当は試験終わりにしたかったところが、アルバイトなどの都合で、みんなが集まれる日が今日しかないらしい。

（ただの飲み会に、お題目を求める必要なんてないと思うけどなあ……）

そんなことより、友治にとって今日の最大の目的は、柚との関係を決定的にすること。おのずと、コップを握る手に力が入る。

「——でさ、結局、柚の好みってどんななのよ？」

みんな、いい感じにアルコールが入って舌も滑らかになってきた頃、女友達が柚に絡み始めた。即座に友治の耳がビクンと反応する。

(……そ、そうだよな。三原さんの好みとか、一応は知っておかないとなっ)

友治も友人と話をしている最中だったが、どうせ彼は酔いに任せて勝手に喋っているだけ。適当に相槌を打ちながら、隣の話に聞き耳を立てた。

「えー……そ、そういう話はちよつとお……」

肩を疎^すめながら、両手に持ったビールのコップで口元を隠す柚。頬を朱に染め、膝も乱れて、太股がわずかに覗いている。

(う……うわ……。酔った三原さん、色っぽい……)

普段が清楚なだけに、ほろ酔い姿の緩さは生唾もの。ごまかすようにチロチロとビールを舐める薄桃色の舌も、胸が張り裂けそうに可愛らしい。

しかし女友達は無粋にも、肘で突いて質問の返事を催促した。

「いいから言いなさいって。柚ってば、可愛い顔して浮いた話ひとつないんだから」

(そ、そうか。三原さん、彼氏いないのか……)

告白で頭がいっぱいで、重要事項であるはずの彼女の男性関係など、今まで考えもしな

かった。いないと知って胸を撫で下ろし、さらなる情報収集のため盗み聞きに精を出す。しかしそれは、友治に後悔をもたらす余計な行爲となった。

「わたし……男の人って苦手」

「——へ？」

耳を疑う。今朝だって、あんなに親しげに話し掛けてきてくれたではないか。聞き間違いない。もしくは自分は特別だ。もはや眼の前で何かの講釈を垂れる友人には目もくれず、彼女たちの会話に集中する。

「だって……男の人って、みんなわたしの胸をジロジロ見て、何か怖いし……」

柚が、チラッとこちらを窺った。まるで、友治を糾弾するかのように据わった眼で。

（お……俺？ それって、俺もっ!!）

ぶるぶると首を振って冤罪えんざいを主張する。しかし、すっかり酔っ払った柚は、俯きながらコップをグッと握り締めた。

「男の人は……嫌い……」

柚らしくない、思い詰めたような呟き声。胸のチラ見に身に覚えのある、ありまくる友治は、そこで軽く意識を失いかけた。

（……で、でも、なるべく見ないように努力してたよっ!!）

心の中で言い訳をする。すると女友達が、それをフォロウするように柚に迫った。

「……まあ、そんだけデカきゃねえ。でもさ、柚。男なんてスケベでなんぼよ？ そして



女は見られてナンボなの！ てか、それはアタシら貧乳族に対する厭味かってーの！」

「巨乳女性の悩みが癪かんに障さわったらしい彼女はビールを呷あおると、いきなり袖の背後に回り、手に余る巨乳を思いきり鷲掴みにした。

「この立派なおっぱいは何のためについてるのよっ!? ほれほれ。本当は彼氏とかに、こうして欲しいんだろ？」

「や、やあああん！ 何するのお!! だ、だから、わたし……男の人とお付き合いなんて無理っ……んああああん！」

まるで、オッサンの絡み酒だ。上品なワンピースが皺になるほど胸をぐねぐねと揉み回し、捏ね回す。しかも、異常に可愛い袖の喘ぎ声。いつもの友治なら、鼻血が出るほど興奮していたはずだ。

しかし今は、アルコールが入っているとは思えないほど、頭も身体も醒めていた。あくまでも男性とのお付き合いを拒む袖に、希望も、決意も、まとめて蹴散らされた気分だ。

(男が苦手なのは分かってたけど……俺も例外じゃなかったってことか……)

じゃれ始めた二人の女性を、酔いの回った連中がはやし立てる中、友治はひとり、寂しい手酌を傾け続けた。

「はあ……はあ……はあ……三原……さんっ！」

泥酔するほど飲みもしなかったのに、どうやって家に戻ったのか思い出せない。ぐるぐ

る回る頭で考えるのは、やはり柚のことばかり。結局、告白計画は頓挫せざるをえなかった。なぜ、あのタイミングで、あんな話を聞かなければならなかったのだろうか。運命の神を呪いたい気分だ。

面と向かって振られたわけではないのだし、思いきって告白すれば、あるいは成功したかもしれない。しかし、高まつたりスクをものともせず女性にぶつかれるほど、友治の勇気は頑強ではないのだ。

「う……む……」

そのくせ諦めが悪いのは、短所なのかそれとも長所か。うつ伏せでベッドに身を放り出し、柚で妄想を始めた。

もし告白が成功していたら。柚が彼女になつてくれたら。飲み会での女友達のように、あのバレーボールが埋まったような胸の半球に触れることができたのだろうか。

「三原さ……んむ……」

枕の感触が、柚の豊かな乳房を思い起こさせ、思わず頬を擦りつけた。

（三原さんの胸……。どんな感じなんだろう……）

つきたての餅のように柔らかいのだろうか。それとも、指を跳ね返すような弾力が。女性経験が皆無の友治にとって、それは未知の感触。AVやエロ本で色や形は見られても、生の肌触りまでは知りようがない。だが、彼女はお嬢様然とした清楚な年上女性。それは綺麗なおっぱいをしているに決まっている。

「……お兄ちゃんのおちんちんにも、いいところあるんだよ？ ほら、見て……」

チュツと、亀頭の先に口づける。甘い痺れが腰に走る。そこには、射精直後とは思えない、逞しさを保った剛直が、雄々しく屹立きつりつしていた。

「え……で、でも、俺いつもこうだぜ……？」

一回くらいでは萎なえない。二回、時には三回出して、やっと柔らかくなってくれる。いつも、それで苦勞させられているくらいだ。

「だから凄しいんだよ。普通は一回で萎しおれちゃうんだから。きやはっ……すっごーい……。お兄ちゃんの、また大きくなったあ……これ、普通の人より大きいんじゃない？」

「そ、そういう……ものなのか……？」

急に瞳をキラキラさせ、感心したようにペニスを見詰める妹に、気圧されながらも悪い気はしなかった。とはいえ他の男性と比べたことがないから、普通ほどの程度のサイズなのか、何回連続で射精可能なのか、よく分からない。そういえば、エロ小説では何回も立て続けに出す描写は少なかったような気もする。

ただ——千佳の言うことを信じるならば——人並み外れた男性機能を持つ友治にも、実は別の弱点があった。射精直後には、快感で頭がぼんやりしてしまうのだ。だから今は、彼女に褒められて単純に嬉しかった。

「じゃ……せっかく大きいままだから……特訓の本番、始めようね……」

千佳の語尾が、くぐもった。精一杯に開かれた小さな唇。濡れた先端が温かい空間に包



まれる。こびりついた精液を拭おうともせず、ペニスに「ぱくっ」と食いついた。

「……よい……スタート……」

調教は、静かに開始された。ストップウォッチのボタンが押され、小さな音で針が時を刻み始める。

小道具を脇に置いた千佳は、膝立ちになって右に左に顔を捻じった。包皮のように肉棒を包んでいたトランクスを、ずるずると剥いていく。唇と歯を巧みに使い、口だけで兄の股間に生えた突起物を掴み出す。

「お、おおうああっ！」

露出したそばから、妹の口の中に消えてゆく勃起肉棒。思わず腰を突き出す。喉を突かれて苦しそうな表情を浮かべたが、それも一瞬だけ。すぐに態勢を立て直し、適度な深さでペニスを捉える。

「ん、んむ……ふああむ……ん。ふお、ふお兄ちゃん……動かないで……あらふいに、任せて……」

「あ、ああ……でも……っ」

頰きはしたものの、唾えられているだけで腰が疼く。じっとしていられない。身体は緊張で動けないのに、芯からじわじわ熱くなってくる。

上から見下ろすと、垂れた前髪に向こうの千佳は、眼を閉じて、動いていないように見える。だが口腔内では頬の内肉が微妙に蠢き、肉茎に刺激を加えていた。性急な刺激で早

漏の兄が射精しないように、じつくりと、じわじわと、快感を与える。

「お……おああああ……は、うっ！」

それでも、過敏なペニスの持ち主には強すぎた。少女の口腔の熱さに我慢ができない。吐息さえむず痒く、友治は身を振らせるだけでは飽き足りない。

——もつと欲しい。もつと直接的で、激しい愛撫が欲しい。

下半身を痺れさせる快感が脳天まで貫き、あつという間に理性を押しつける。

「ご……ごめん千佳っ、俺……あああッ！」

「んむ？ ンぐッ、むっふうううっ!!」

千佳の頭をガツと掴んだ。間を置かずに乱暴に振り立てる。なまじツインテールが掌にうまく収まったため、抽送が容易になってしまう。

——がつ、じゅずっ、ぶじゅ、じゅるぶぶっ！

「ちよ……ちよつろ待つれ、お兄ひゃ……ん、んみゅっふううんむっ！」

涙目になった千佳の制止など聞こえない。初めて体験するフェラチオに、ペニスで感じる唇の気持ちよさに、欲求が自制心を上回る。湧き上がる欲望に身を任せ、夢中になって妹の口腔を犯す。

（ああ……き、気持ちいい……女の子の……千佳の唇……。千佳……ちか……！！ あああ

……お、俺、何やってんだ。ち、千佳は、女の子で、小さくて、妹で……）

いたいけな少女を氣遣う余裕など失い、暴走する友治。そんな兄を止めるのを諦めたの

か、それまで待機していた舌までもが愛撫に参加してきた。カリ首の段差を這い、肉幹に絡みつく。唾えているだけだった唇も、本格的な抽送で、あつという間に友治を二度目の絶頂へと導いてゆく。

——ちゅぱッ！　ちゆるちゆる、ぶちゅーっ、れろ、ちゅぶるんっ！

舌が、そしてピンクの唇が、はしたない音を立ててペニスに唾液をコーティングする。テラテラ輝く透明な粘液にべったり濡れた分身が、妹の口に入入りしている。

量が多いのか、余った唾液が裏筋を伝い、千佳の顎から滴り落ちた。卑猥な光景に、最大まで勃起したと思っていたペニスがさらに硬くなる。唾液を吸る音がするたび、痛いほど硬直したペニスに妖しい悦びが走る。

「ああ……くうあああッ！」

「ンもう、ふいくら、ン……いくら初めてだからって、あむんっ……しゅこ、あふ、少しは頑張つて、むふう……みしえなさいよ……んぐ、じゅぶずッ！」

言葉では罵りながら、熱心な舌使いで兄を追い詰めた。頑張らせるつもりなどないかのように、自ら頭を振って勃起に唾液を、舌を、唇を擦りつける。

「んみゅっ、ずぼっ、ふみゅっ……ふむっ……ふあ、じゆる、じゅぼっ！」

千佳の頬に赤みが差した。息も荒くなってくる。

「ち、千佳っ……そんなにされたら……あああッ、千佳、ちかっ……ちかあああッ！」
フェラチオに興奮する妹の姿に、友治の背骨へ蕩けるような電流が走った。勢い余った

ペニスが口から飛び出す。柔らかい唇の粘膜に擦られ、カリ首が跳ねる。

「うああああ、出る、千佳、出る千佳ッ、ちかああああああッ！」

——ぶあつ、ぶりゆう、どびゆるるるうううッ！

妹の名を叫びながら、欲望の溶岩を噴き上げた。水を吐きながら暴れるホースのようにペニスが跳ね回り、放物線を描いた白濁液が、紅潮した少女の顔に降り注ぐ。

——びちゃ、びちゃあつ！

「ひやあああん、あつつういいいい！」

さっきの顔射も乾ききっていないのに、瞼も唇も、愛らしい顔の右半分が、乳白色の粘液でドロドロに上塗りされる。

「あ……はあ……」

千佳が、精液で潰されていない方の眼をうつすらと開けた。青臭さを吸い込むように、薄い胸を膨らませる。

「ん……もう……。だから早すぎるって……。何のための特訓だと思ってるの？ ああもう……顔中ベタベタ……。はあ……。精液って、やつぱり……。んふ、くつさあい……」

「はあ……はあ……はあ……。ご、ごめん……」

射精の気だるさに、ガックリと膝を突く。早すぎる兄にむくれてみせる千佳だが、友治には、彼女の瞳が、精液の臭いに歓喜しているように見えた気がした。

自分も適当に見て時間を潰そうと、店に足を踏み入れた。その襟首を、千佳がグイッと掴んで引き戻す。

「お兄ちゃんは何物番。あつちで座ってるなりして休んでなさい」

醒めた眼の妹が指差したのは遙か彼方。広いフロアの対面に位置するフードコート。

「俺だけ除け者にする気か!？」

店内には、カップルも数組いるのに。そんな抗議も通用せず、彼女たちの荷物をドツカと渡され、友治はひとり、一行から弾き飛ばされてしまった。

仕方なく、ファーストフード店でジュースを購入。中途半端な時間なため、数百ある席も大半が空いている。友治は、分かりやすいように一番はしっここの席で待つことにした。

「まあ……水着も形状的には下着と大差ないし、俺がいたら恥ずかしいのかな」

そういう感覚に鈍いところが、妹に嫌われる理由なのかもしれない。

「しかし女の子ってすごいな。二人とも初対面なのに、一緒に買い物ができるなんて」

考え事をしていたら、脇が重くなってきた。慣れない場所を歩き回って疲れたのかもしれない。荷物も預かっているのに、こんなところで居眠りしたら、また千佳に怒られる。

(そうだよ、千佳に余計な体力使わされたからだ……!)

自分も気持ちよかったのを棚に上げ、とりとめのないことを考えていると。

——とんとんと、肩を叩かれた。いつの間にか眠りに落ちていたらしい。回転の鈍った頭を巡らすと、すぐ脇に、小さな包みを抱えた柚が、どことなく困惑顔で立っている。

「あ、えーつと……も、もう水着……じゃなくて、買い物は、お、お済みれすかつ!?」
居眠りの恥ずかしさをごまかそうと、無理に話題を転換したため嘔み嘔みだ。これでは余計に恥を掻いたようなもの。しかし、柚は友治の方を見てもいなかった。心ここにあらずといった感じで、無闇に視線を泳がせている。

「……どうかしましたか?」

「え!? あ、あー、ほら! 可愛いのがあったから、つい水着、買っちゃった」

話題がワンテンポ遅れている。頬が上気しているし彼女も疲れているのだろうか。

「今日は、もうそろそろ解散ですね。えーつと、千佳は……」

そういえば姿が見えない。妹の姿を探す友治の腕を、柚がギュッと握ってきた。

「い、妹さんなら先に帰りました! あのそれで……きよッ、今日は……わたしの家で、ば、晩ご飯……食べて、いかない……?」

声がひっくり返ったり、語尾が消えそうだったり。俯いた顔は耳まで真っ赤だ。もしかして、これを言いたくて落ち着きがなかったのだろうか。

「えっ?! い、いやでもそんな、急に悪いし……!」

冷静さを欠いているのは友治も同じだった。あまりにも突然の申し出に、気の利いた方に頭が働かない。滅多にないこんなチャンスを、自ら棒に振ろうとするなんて。

「い、妹さんには、もう了解を取ってあるの。ほら!」

そんなに慌てなくてもと思うほど服をあちこち探った柚に、携帯を渡される。留守電に、

千佳のメッセージが残されていた。

『あー、あー、伝言です。お兄ちゃん、今日は袖さんちに必ず行きなさい。断ったらダメ。帰って来ても、家に入れてあげないからね。以上!』

小一時間前までは袖との勝手な接触到腹を立てていたはずだが、一体どういう風の吹き回しだろう。何はともあれ、教官殿のお許しが出たのだ。

「じゃ、じゃ……ちよつとだけ……」

千佳や袖の言葉を、額面通りにしか受け取らなかった友治は、次の展開に大した期待を抱いていなかった。大きな進展などあるはずがないと。

——そして、そのせいで、袖の家に着いた時、再びパニックに陥る羽目になった。

「三原さんも、自宅から通ってたんですか」

街灯の灯り始めた閑静な住宅街で、高い塀に囲まれた三階建。一階はガレージになっていて、門扉の向こうの階段を上がった先が玄関らしい。薄暮れが、白い壁がいつそう家を大きく感じさせる。漂う高級感に、袖のお嬢様っぽい言動の裏付けを見たような気がしたが、問題は家の大きさではなかった。友治を及び腰にさせる、もっと重大な事実が発覚したのだ。

「ゆっくりしていいよ。今夜は……両親は、留守だから……」

脳天を揺さぶるパンチが炸裂。思考が停止する。魅惑的とするにはあまりに危険なセリフに耳を疑う。バツと見上げた家に、灯りはない。本当に誰もいないようだ。

「——着替えてくるから、待ってて。楽にしているね」

客間に通され、緊張はピークに達した。楽になって、できるわけがない。全身がガチガチだ。ソファに腰を下ろした身体が、各所で直角に曲がっている。

(いやいや待って待って。落ち着け……考えすぎだつて)

眼を閉じて、ひとつ大きく息を吐く。彼女は友治に下心がないと思つたからこそ、夕食に招いてくれたのだ。その信頼を裏切つてはいけない。スーハースーハーと深呼吸を繰り返し、やつとのことで落ち着きを取り戻す。

「トモくうん。今日は暑かったし、先にアイスでもどうかかなあ？」

キッチンから柚の声がした。食前のデザートには違和感もあつたが、確かに日が暮れたばかりで、まだ暑い。ちょうど冷たいものが欲しいと思つていたところだ。

「お……お待たせ……」

「あ、はい。ありがとうござ……いま…………ッ!!」

唖然とする。言葉が出ない。どう驚いていいのかさえ分からぬ。せつかく取り戻した冷静さなど、一分もたない。友治は、アイスを受け取ろうとした手を伸ばしたまま、人形のように硬直していた。

柚が、身体のラインがはっきり分かる、裸同然の姿で現れたのだから。日焼けしていない白い肌に、辛うじて貼りついているかのような、黒い水着という刺激的な姿で。

全体的に肉づきは薄いのに、そこだけは飛び抜けて豊かな乳房。流れるように括れたウ

エスト、張りのある腰つき。決して豊満ではないのに、メリハリのある不思議な肢体。

水着のサイズが合っていないのだろうか。小さなカップは肌に食い込み、乳房の形をくつきりと浮かび上がらせていた。先端には、小粒な突起までが浮かんで見える。

(あれって……まさか……ちちち、乳首!?)

失礼は承知の上で、生唾を飲み込まずにいられなかった。脚の付け根にも、黒い布が食い込んでいる。お尻でも、その形を明瞭に浮かび上がらせているに違いない。

もちろん、こんなものが彼女の部屋着であるはずがない。かといって、ここが家の中でなく、例えば海だったなら。それでも友治は驚いただろう。黒い水着は極端に小さく、局部を覆う程度の面積しか持ち合わせていないのだから。

(……でも……全然似合っていないよ、三原さん……)

無理をしている感じが強く、色気よりも痛々しさすら感じる。袖には、もっと清楚なものもいい。名前の通りに爽やかな、例えば、ふんだんなフリルで飾られているような。

「あの……トモくん、アイスを……」

水着を褒めるべきだろうか。それとも、この件には触れない方がいいのだろうか。悩む友治の脇で、袖は、まるで召使いのように膝を突いた。両手に持ったソフトクリーム型のアイスのひとつを、うやうや恭しく差し出す。

無言で受け取ったが、少しもそれに意識が向かない。視界に飛び込んでくるものといえは、窮屈そうに水着で締められた、乳肉の圧倒的な存在感のみ。

(だ……駄目だっ！ 三原さんは、胸を見られるのが嫌だって言ってたじゃないか！)

恥ずかしがり屋の彼女が、どうして急にこんな真似を。それでも、凝視してしまう。疑問は、視界いっぱい広がる谷間に吸い込まれてしまう。

「いただきます……」

それでも袖はお構いなしに、自分のアイスを食べ始めた。しかもなぜか、友治の足元で正座して。首輪で繋いでいるわけでもないのに、まるで、従順なペットが飼い主に寄り添っているかのようなだ。

ぺろつと、白いバナラを舐め取るピンクの舌。上品に、小さく開いた唇で少しずつ。そんなペースでは、すぐに溶けてしまうと心配になるほど、ゆっくりと。

「——!!」

唇を染めた白いクリームが、友治からいかがわしい記憶を引き出した。はあはあと鼻息が荒くなる。体温が上昇する。そのせいかどうか、先にこちらのアイスが溶け始めた。いつの間にか手はベトベト。股間にも、大きな塊が落ちている。

「うわあっ!! す、すみませんっ！ ええつと、タオルか何か……」

いくら水着に見惚れていたとはいえ、とんだ失態を晒してしまった。袖も眼を逸らしているし、恥ずかしさも倍増した。だが彼女の取った行動は、さらに友治を混乱させた。

自分のアイスのコーン部分を、胸に挟む。そして彼女は、困惑する友治の手を取ると、薔薇の薔のように可憐な唇を開き、アイスまみれの指を舐め上げたのだ。

「ひいうあああつ!!」

突然のことに、意味不明の悲鳴が上がる。反射的に引こうとした手を、袖が必死になつて引き止めた。桃色に濡れた舌を、ゆつくり、ねつとり、指に押しつけてくる。

「ペろ……ちゅぷ、れる……。ふう……。あーん……。んぐ……。んぐ、じゅるっ……」

長い睫毛を震わせて、指の股、そして指先までを丹念に舐め回す。先端をチロチロくすぐったかと思うと、人差し指と中指を、まとめて口の中に招き入れた。

「ふおわあああ……!」

ゾクゾクする。背中が震える。そればかりか、まるでフェラチオのように指に絡む肉片に反応し、身体の一部がむくむくと膨れ上がる。

「あ、あのっ! 自分でできませんからっ!」

それが逆に、友治を我に返らせた。こんなところで欲情している場合ではない。

「……迷惑?」

「めめめ、迷惑なんかじゃありません! そんなわけないじゃないですか!」

指と唇の間に唾液の糸を引きながら、悲しげな瞳に尋ねられる。冷静な判断力を失っていた友治は、欲求を正直に白状してしまった。

「そっか……よかつたあ……」

尻を下げ、まるで幼女のように無垢な笑顔で安堵する袖。いかがわしい水着や、いやらしい舌使い。それらとのミスマッチで、どちらが彼女の本性なのか分からない。

「こっちも、アイス、ついちゃってるね……」

再び指に口づける。しかし、本命はそこではなかった。彼女の上半体が、ゆっくりと倒れてくる。まさかという予感が頭をよぎった。制止しないと。そんなこと、彼女にさせたくない。それなのに身体が裏切った。股間に顔が埋まるのを、あえて見過ごしたのだ。

「あ……あ……！」

ちゆるつと、尖った唇がジーンズに落ちたアイスを吸い取る。だが、その盛り上がりや硬さに、彼女の頬が強張った。まじまじと見詰め、確かめるように指でなぞる。分厚い布地越しに、遠慮がちに。だが友治は、その微かな接触到さえ小さな呻きを上げた。

「これが……そう、なのね……」

何がそうなのか。彼女は意を決したように頷くと、何度も何度も、啄むようなキスを繰り返す。金縛りに遭ったように、ありえない光景から眼が離せない。

「な、中にも、染みてたら、大変だよねっ!？」

こちらを見ようとせず、口づけの雨を降らせながら、ファスナーに手を掛けた。だが勝手が分からないのか、うまく開けられずに四苦八苦している。

（見せたい、見せられない。触らせたい、触らせられない……）

葛藤は、短かった。欲望慣れしてしまつた心と身体は、いとも簡単に気持ちよくなれる方を選択したのだ。苦心している袖の手を押さえ、呆けたままに自らファスナーを開ける。はちきれそうに勃起したペニス、待ちきれずに外へと飛び出す。

「きやあッ!!」

柚の悲鳴を聞いて、ハッとした。いきなりこんなものを見せたら驚くに決まっている。慌ててしまい直そうとした手を、しかし今度は、彼女が制した。その瞳が興味深げな光で爛々と輝いている。

「か……かわいい……」

「かわいいって……。怖く……ないんですか？」

「少し。でも……タケノコみたいで、おいしそう……」

ジーンズからニョッキリ生えたそれは、確かにそう見えるかもしれない。それにしたつて、初対面の肉棒にそんな感想を持つなんて。

「ま……まさか、三原さん……こういうの、初めてじゃない……とか……?」

「ううん。初めてよ……。でも不思議……。この臭い嗅いでると……どうしたんだろ……何だか、身体が熱く……」

子リスみたいに小鼻を動かしていた彼女の目尻が、とろんと下がる。しかも、その言葉が嘘でないのを示すように――。

「みッ、はらっ……さんッ!!」

ぱっくり、亀頭に食いついた。舐めたアイスでてらてら光る、まだ遠慮がちの唇。その感触に驚いた。妹のそれと、まったく違う。同じ器官のはずなのに。

（何だこれ……。と、とろとろで、蕩けるみたいで……は、あああ……）

まるで、溶けて亀頭と一体になるかのようだ。新鮮な感動に胸が詰まる。やめさせなければ。しかし押し返そうとした指は頑として動かず、身体が快感に引き込まれていく。

柚は、しばらく唇を動かさずにいたが、やがてペニスの味に慣れたのか、舌を小さく突き出した。れろつれろつと、ひと呼吸ごとに強く押しつけてくる。先端から裏筋へと、次第に行動範囲を広げ、失禁にも似た疼きで肉棒を熱くさせる。

「はあっ！ ど、どうしてこんな……あッ！ へ、平気っ……なんですか……っ!?」

彼女は、言葉ではなく唇で答えた。眼を細め、最初から好物であったかのように、脈打つ肉塊に舌を這わせる。もう、落ちたアイスなんて関係ない。

「んぐっ……しゅぶう……ちゅっ、はあ……ん、ちゅじゅるうっ！」

べつとりねつとり、溶けかけのソフトクリームを慌てて舐めるように、流れる唾液を啜り上げる。その小さな振動だけで、ペニスが芯までズキズキ疼く。

「えへ……ねえトモくん……。ズボン、脱いじゃって……」

まるで催眠術に掛かったように、だらけた笑みを浮かべる柚。彼女は、半ば無意識で動いていた。そして、それは友治も。ジーンズとトランクスを脱ぎ捨て、ソファに横たわる。その上に覆い被さるように、柚の身体が影を落とした。

「ねえ……トモくん……」

甘えるような声の柚が、するつと水着のブラを外す。快感に呆けた友治といえども、あまりに大胆な彼女に異常を感じずにはいられない。いや、本当は、童貞の悲しさで、この

先に進むことに怖れをなしたのだ。

「み、三原さん……お、男に胸を見られるの、イヤだったんじゃ……」

「そんなことより……ねえ、名前で呼んでよ……袖つて……」

黒い紐が、胸を押さえる腕にぴらつと引つ掛かる。言葉の意味を聞き直す前に、もう一方の手で、なだめるようにペニスを撫でられ、思考が飛んだ。

「ゆず、さん……！ 袖さん、袖さんっ！ ゆ……ああああ……！」

他の言葉を失い、何度も名前を呼んで腰を反らせる友治に、袖が緩んだ笑みを浮かべる。腕を顔の両側に突いた。紐の解かれていた黒水着が、ポロシャツの上に落ちる。迫りくる白い膨らみ。頂点に咲く、小豆大の桃色ぼつちり。

（む……胸っ!! ……おおお……おっばい!）

バレエボールのような量感と、ぼよぼよ揺れる綿菓子のような柔らかさ。にもかかわらず、引力に負けずに美しい形を保つ、奇跡の乳房。それが、憧れの胸が、何も覆うものもなく眼の前に。冷静でいられる方がどうかしている。可憐に咲く小さな蕾にむしゃぶりつきたくなる情動が、身体の奥から突き上げた。

——くちゅっ、くちゅっ。

彼女が自分の胸を持ち上げるように捏ねる。そのたびに鳴る粘着音。彼女の胸も、挟んでいたアイスが溶けてどろどろ。ふやけたコーンはテーブルに投げ捨て、悪魔的に愛らしい笑みを浮かべ、ゆつくりと友治の腰にのし掛かる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索

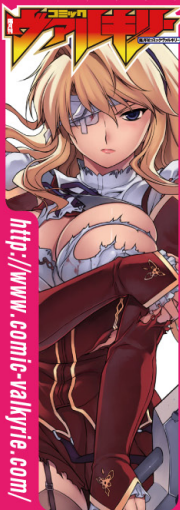


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!